

知ろう！ 仏教讃歌

(10)

山口 篤子

《念仏和讃》

「奉讃伝灯作法」より

御堂で声と心をあわせ一 つになる

「大衆唱和」が重要視され始めました。
このような背景のもと誕生した新しい法要は、伝統的な声明による作法とともに、本願寺の法要の一翼を担ってきました。なかでも本山の親鸞聖人750回大遠忌法要において、西洋音楽を用いた「宗祖讃仰作法 第三種」がにぎにぎしくつとめられたことは

和讃》は、この「宗祖讃仰作法 第三種」の《念仏・和讃》を基にしています。雅楽に導かれてオルガンの伴奏が始まった後、念仏と和讃6首が唱えられます。そして曲の終わり間近、伴奏がふっと消え、両堂に響くのは出勤の僧侶と参拝者の声だけ……。一つ所に集った者同士が声を合わせることで、心も一つになるのだと感じられる瞬間です。

お念仏を喜ぶ絆の歌、それが仏教讃歌であり、おつとめの曲なのです。

(本願寺派総合研究所 仏教音楽・儀礼研究室研究員)

昨年10月から始まった伝灯奉告法要のおつとめ「奉讃伝灯作法」は、正信念仏偈を中心に、伝統的な声明と西洋音楽による楽曲によって構成されています。そのなかで、お正信偈の後に唱えられる《念仏和讃》は、今もつとめ親しまれているおつとめの曲といってもよいでしょう。

を取り入れた新しいおつとめは、門信徒の間で仏教讃歌を歌うことが根付いていった、結果の一つに他なりません。本願寺派で西洋音楽を用いる法要作法が初めて制定されたのは、1963年。その端緒となる試みは、戦後間もない頃、宗門校で始まりました。京都女子大学や相愛女子大学（現・相愛大学）などで、仏教讃歌を用いた礼拝が行われるようになったのです。また同じ頃、法要や儀式において、



3月7日からは、伝灯奉告法要第5期がつとめられる（写真は第4期）



参考音源：「奉讃伝灯作法」本願寺式務部制作
収録楽譜：『第25代専如門主伝灯奉告法要しおり』

※スマートフォン、タブレットなどで上記QRコードを読み込むと掲載曲を聴くことができます。ご加入のプランなどに注意してご利用ください